

基本目標

第二次計画に掲げた「高知県で育つすべての子どもに読書習慣を定着させ、読書の質を高めることで豊かな心と感性を醸成し考える力や表現力を身に付けるとともに、人との絆を育む」という考え方を継承しつつ、読書を取り巻く社会情勢の変化や今後重視すべき視点を踏まえて、次の3点を基本目標として取り組む。

1 自主的に読書活動に取り組む子どもを育てる

2 情報を読み取り活用する子どもを育てる

3 あらゆる機会とあらゆる場所において読書ができる環境をつくる

取組方針(具体的な取組)

1 自主的に読書活動に取り組む子どもを育てる

1 発達段階に応じた読書活動の推進

(1) 乳幼児期における取組

- ・ブックスタート応援事業
- ・子ども読み聞かせ運動(読育運動)の実施
 [重]: 子ども読み聞かせ運動(読育運動)
- ・保育者への園内研修等の充実(園内研修支援事業)
- ・オーテピア高知図書館による図書の資料収集・提供、イベント等の実施

(2) 学童期から青年中期における取組

- ・推薦図書リスト「きっとあるキミの心にひびく本」の配付
- ・読書楽力検定の活用促進
 [重]: 読書楽力検定事業
- ・高等学校における学校図書館の組織的、計画的な活用や生徒の自主的な読書活動、学校図書館の情報発信の推進
 [重]: 高等学校学校図書館教育推進事業
- ・オーテピア高知図書館による図書の資料収集・提供、イベント等の実施

(3) 特別な支援が必要な子どものための取組

- ・特別支援学校における読書活動の充実
 ⇒特別支援学校読書活動推進事業(令和元年度まで)
- ・特別支援学校における障害に配慮した読書環境の整備・充実
- ・オーテピア高知図書館における図書資料及び貸出サービスの充実

(4) 子どもの読書活動の意義や大切さを伝える総合的な取組

- ・市町村による子ども読書活動推進計画策定への支援
- ・「子ども読書の日」(4月23日)等の啓発
- ・文部科学大臣表彰による優れた取組の奨励、普及、啓発

【成果】

(1) 乳幼児期における取組

- ・推薦図書リスト「絵本 おはなし・宝箱」と啓発用チラシの配付(平成29年から令和元年度:19,641部)
- ・園内研修の実施や年間指導計画に読書活動を位置付けている園が増加
 (研修実施率: H29 77.2% → R1 82.8%)

(2) 学童期から青年中期における取組

- ・「きっとあるキミの心にひびく本」を改訂し、幅広いジャンルの本を児童生徒に紹介。
 (配付数: R1 11,300冊)
- ・「読書楽力検定」に延べ1,936人が参加
 (平成29年度~令和元年度)
- ・学校図書館を探究的な学習の場として積極的・計画的に活用するための講義やワークショップを行い、図書館を利用した授業の増加につながった。
- ・ティーンズ向けの資料・サービスの充実
 (県立図書館での児童図書購入点数: R1 1,688点)

(3) 特別な支援が必要な子どものための取組

- ・読書週間の設定や図書・視聴覚便りの発行といった活動の定着化(令和2年度:12/13校)
- ・外部講師を招聘した読み聞かせや朗読、エプロンシアター等の取組が進み、読書活動の充実を図ることができた。

(4) 子どもの読書活動の意義や大切さを伝える総合的な取組

- ・優良事例の紹介や他市町村の策定状況等の情報提供を行うことで、モデル事例の横展開が図れた。
- ・文部科学大臣表彰を受賞した学校は、取組を評価されることにより、学校図書館を利活用した教育活動に引き続き意欲的に取り組んでいる。

【課題】

(1) 乳幼児期における取組

- ・市町村によって乳幼児とその保護者に向けた読書活動を支援する取組の内容に差が生じている。
- ・保護者、図書館、ボランティア等の連携は、伸び悩みが見られる。
 (連携の実施率: H29 86.8% → R1 85.2%)

(2) 学童期から青年中期における取組

- ・全国学力・学習状況調査において「読書が好き」と回答する児童生徒は依然として全国と比べて高いが、不読率に改善傾向が見られない。
- ・読書を促すだけでは習慣づけるまでには至らない。児童・生徒にとって習慣づけの確立のためには、読書環境の整備を進める必要があり、本と子供をつなぐ学校司書や図書支援員の積極的な介入が働きかけやアドバイスが求められる。
- ・図書館に自習にしか来ないティーンズをどのように読書や図書館資料を使った探究的な学習に導いていくかが課題である。

(3) 特別な支援が必要な子どものための取組

- ・障害特性に応じた読み聞かせについて、教員の読書指導力向上を視点において取り組む必要がある。
- ・児童・生徒数の増加で、学校によっては図書室のスペースや資料の確保に課題がある。

(4) 子どもの読書活動の意義や大切さを伝える総合的な取組

- ・計画の作成は33市町村で行われているが、改訂が行われていない自治体は15市町村である。

【検証・次期計画に向けた論点整理】

- 本に親しみ、読書を習慣づけるためには、本・読書との出会いが始まる乳幼児期が極めて重要な時期になる。引き続き園内研修の実施や、乳幼児健診等で取り組まれるブックスタート、保育所・幼稚園等の中で、保護者に対し親子間・家庭内での読書活動の意義や大人としての役割の認識を高める働きかけが求められている。
- 児童・生徒の読書率を示す指標は、全国平均よりも高い数値になっているが停滞している状態にあり、中学校、高等学校での不読率は依然として高い傾向にあることから、普段から読書をしないう読書習慣がない人に対する効果的な支援が必要である。
- 青年期においてはスマートフォンの普及にも影響され、中学校から高等学校と年代が上がるにつれ、不読率も高まっている状態にある。また、スマートフォンを通じたSNSや動画サイト等のコンテンツの利用の増加も、読書に親しむ機会の減少の一因となっていると考えられる。

取組方針(具体的な取組)

1 自主的に読書活動に取り組む子どもを育てる

2 地域や人とのつながりを深める読書活動の推進

- ・読書活動を通じた異年齢交流の促進
- ・学校支援地域本部等の仕組みを活用した読書活動の推進
- ・NPOと連携した読書環境の改善
- 【重】：出張図書館事業
- ・地域の教育関連施設と連携した読書活動の推進

2 情報を読み取り活用する子どもを育てる

3 学校教育における読書活動の推進

(1) 学校図書館の機能の充実

- ・学校図書館図書標準達成校数の拡大
- ・レファレンスの協力
- ・パスファインダーやブックリストの作成・提供
- ・学校図書館の要望に応じたまとめ貸出し

(2) 情報を読み取り探究型の学習につなげる読書活動の推進

- ・小、中、義務教育学校における学校図書館の組織的、計画的な活用の推進
- ・研究指定校における研究の推進と成果の普及
- ・発展的な学習の推進
- 【重】：探究的な授業づくりのための教育課程研究実践事業(学校図書館活用型)
- ⇒学校図書館を活用した「読み」を鍛える拠点校事業(H30から)
- ・オーデピア高知図書館による調べ学習に役立つ資料の収集、提供

【成果】

- ・保育所・幼稚園等での小中高生との交流では、絵本の読み聞かせが多く実施されており、交流を実施する園も年々増加傾向にある。
- ・高校生が授業やボランティア等で園児に絵本の読み聞かせを行い、異年齢交流を通じた読書活動を進めることができた。また、読み聞かせの活動が、公共図書館との連携や、生徒自身が目的を持って選書することにつながっている。

【検証・次期計画に向けた論点整理】

- 読書活動を通じた異年齢交流は増加傾向にあり、本に対する興味の有無に関わらず、子どもたちが様々な絵本や物語に触れ、発達に応じた本を選び、交流を深める機会になっている。そして、読み聞かせを行う必要性を理解、体験することによって、自分が保護者になったときに家庭内での読書活動の習慣化につながりやすくなると考えられる。このような世代を超えた読書活動を発展させていくためにも、小・中・高校生それぞれの発達段階に応じた継続的な取組が必要である。

(1) 学校図書館の機能の充実

- ・県立図書館から県立学校(高校)へのまとめ貸しについては一定の準備を整えることができた。

(2) 情報を読み取り探究型の学習につなげる読書活動の推進

- ・各教育事務所等と連携し、各指定校の進捗状況等について共有化を図るとともに、計画的・継続的な指導・助言を行うことができた。
- ・指定校の公開授業を研修の場とし、小中学校の教員が学校図書館資料を活用した授業について研究し、学び合う場を設けたことで、授業改善につながった。

【検証・次期計画に向けた論点整理】

- 児童・生徒の自主的、自発的な読書活動の推進には、学校図書館資料の充実、運営等に当たる司書教諭及び学校司書の配置やその資質・能力の向上の双方を図ることが基本となる。しかし、県内の学校図書館における資料費や司書等の配置率は全国と比べ厳しい状況にあり、子どもたちにとって「読みたい本」、「読める場所」、「読書のお手本」が確保されていなければ、図書館の利用率の低下や不読率の上昇は免れない。
- 児童・生徒にとって本と関わる最も身近な施設である学校図書館の改善は重大な課題であり、市町村に対し、読書活動の重要性や学校図書館の役割についてより理解を深め、資料費や司書等の配置の充実を図れるような働きかけが必要である。

【課題】

- ・小、中学校においては、異校種に読み聞かせに行くなどの校種間連携を行っている学校が少ない。
- ・図書館・図書室として、新たなイベントの開催や連携体制を構築する人員が不足している。
- ・公立図書館が未設置の地域において「出張図書館」を実施するには地域住民の理解や協力だけでなく、市町村教育委員会との綿密な連携が必要である。

取組方針(具体的な取組)

【成果】

【課題】

3 あらゆる機会とあらゆる場所において読書ができる環境をつくる

4 オーデビア高知図書館による読書環境の充実・強化

(1) 子どもの多様なニーズに対応する図書館サービスの充実

- ・レファレンスの充実
- ・電子書籍の導入
- ・物流便による資料の配送
- ・貸出サービスの充実
- ・児童図書等の資料の充実
- ・読書の楽しさを知るイベントの実施
- ・上映会、体験会の開催

(2) 市町村立図書館等への支援

- ・児童書の全点購入による選書支援
- ・児童サービス研修会等の実施
- ・相互貸借の活性化
- ・図書館活用講座の実施

(3) 学校図書館との連携・協力

- ・市町村立図書館等へのまとめ貸し
- ・パスファインダーやブックリストの作成、提供
- ・訪問支援、研修

5 子どもの読書活動を推進する人材の育成

- ・読書ボランティアの養成
 - 【重】：読書ボランティア養成講座
- ・読書ボランティアリーダーの養成と組織化
 - 【重】：読書ボランティア機能強化事業
- ・子ども司書養成講座の実施
 - 【重】：子ども司書養成事業
- ・読み聞かせ研修会や講座の実施
- ・教職員等の学校図書館活用力の向上

(1) 子どもの多様なニーズに対応する図書館サービスの充実

- ・レファレンス・サービスについては、オーデビア高知図書館開館後の件数は想定より多くなっている。(こどもカウンターでのレファレンス件数:R1 所蔵7,301件 事項799件)

(2) 市町村立図書館等への支援

- ・児童図書選定支援コーナーを設け、市町村立図書館(室)、団体等が閲覧できるようにしている。市町村で選定の参考にした実績も出てきている。
- ・市町村図書館の職員等に対して、研修会、勉強会、図書館活用講座等、多彩に実施している。

(3) 学校図書館との連携・協力

- ・市町村への一括貸出冊数:R1 4,583冊 (うち学校依頼による貸出 2,754冊)

(1) 子どもの多様なニーズに対応する図書館サービスの充実

- ・試験対策の座席利用のためにのみ来館する生徒に対し、日常的な読書に導くことができていない。「学習」は試験勉強だけではなく、読書もあることを知らせる必要がある。

(2) 市町村立図書館等への支援

- ・児童図書選定支援コーナーは利用要件を段階的に緩和し、使いやすくしたが、なお、認知度を上げることが必要である。
- ・児童図書の選定や児童サービスの運営については、ノウハウを伝えるなどの支援が必要である。

(3) 学校図書館との連携・協力

- ・図書館未設置町村の学校図書館の支援体制の確立が必要である。

【検証・次期計画に向けた論点整理】

○家庭や学校等に密着した読書支援ができる市町村立図書館等は、地域の読書活動の中核を担う重要な施設であるため、読書環境の地域間格差を解消する必要がある。

- ・読書ボランティア講座では、読み聞かせの技術や年齢にあった本の選定方等学び、活動の中で生じる疑問・課題への対応方法といった情報交換の場としても機能した。(延べ参加者数:563人 H29~R1)

- ・「子ども司書」に延べ154人が認定(平成29年度~令和元年度)

- ・県立高等学校の学校図書館システムのクラウド化により、学校図書館が有する読書センター、学習センター及び情報センターとしての三つの機能を発揮するための環境整備が進んだことで、学校図書館に携わる教職員が、それぞれに求められる役割・職務を果たすための一助となっている。

- ・読書活動に携わる地域人材の育成については、彼らの経験や性質を考慮したうえで、幅広く学びの機会を創出し、活動の支援環境を充実させながら、その情報が手元に届く広報が必要である。

- ・「ボランティア」の性質上、リーダーとしてその組織を先導しようとする人が現れにくく、研修内容の設定や参加者数の見込みを計画立てることができなかった。

- ・絵本の選定や読み聞かせの大切さについて伝えるとともに、地域の図書館や人材を生かしながら、豊かな読書活動につながるような研修内容を工夫していく必要がある。

【検証・次期計画に向けた論点整理】

○新型コロナウイルス感染の拡大によって、これまでのような人を集めた研修会を開催することが難しくなっているが、それ以前から市町村立図書館や学校図書館で働く職員は勤務形態等の事情から研修を受けるために外出すること自体が厳しい状態にあった。子どもと本をつなげる重要な役割を担う人材の専門性を高めていくためには、オンラインやオンデマンドでの研修の実施等、状況に応じた研修や講座の在り方を検討し、現場で活動する人材にとって学びやすい体制をつくりあげていくことが求められている。

第四次計画の論点

【前提の再確認】

- ① 読書の定義
- ② 読書の目的と効果

【重点課題】

- ③ 親子間・家庭内での読書活動の推進
- ④ 自主的、自発的な読書活動の推進(不読率の減少)
- ⑤ 読書環境の充実
- ⑥ 子どもの読書活動を支える人材の育成

【社会構造の変化】

- ⑦ ICTの発達、GIGAスクール構想下での読書活動の推進
- ⑧ コロナ禍による生活様式の変化に対する読書活動の在り方